小　　論　　文
（法科大学院）

平成１６年度

注　　意

1　問題は４ページ、解答用紙は１枚（表・裏）である。
　　下書用紙は別に配付する。
2　解答用紙の所定の場所に受験番号を記入すること。
3　解答文は解答用紙に横書きとする。
4　解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字
　　の訂正のほかは使ってはいけない。
5　書き損じても、代わりの用紙は交付しない。
6　試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ること。
7　問題の内容についての質問には、応じない。

平成１６年度　法科大学院入学試験問題

平成１６年１月２５日実施

小　論　文

問　次の文章は、近代科学の「科学的な生態学的知識」(Scientific Ecological Knowledge＝SEK) とイヌイト（カナダ極北圏の先住民族）の人々の「伝統的な生態学的知識」(Traditional Ecological Knowledge＝TEK) が、野生生物資源の共同管理体制の下で、協力しつつも衝突せざるをえない様子について述べたものである。

この文章から直接読み取れる「科学的な生態学的知識」(SEK) と「伝統的な生態学的知識」(TEK) の違い、および、この文章には直接書かれていないがそこから推論できる両者の違いを整理した上で、これらの異なる知識体系を、野生生物資源の共同管理にあたってどう活かしていくべきか論じなさい。(解答用紙は１枚。2000字以内。句読点と算用数字は１字として扱う。)

カナダ極北圏では、1970年代後半に野生生物資源の管理に先住民が参加する共同管理（Co-Management）制度が芽生えて以来、近代科学の「科学的な生態学的知識」(Scientific Ecological Knowledge：以下SEKと略す）だけではなく、極北の先住民であるイヌイトの人々の「伝統的な生態学的知識」(Traditional Ecological Knowledge：以下TEKと略す）を共同管理に活用することの重要性が認識されるようになってきた。イヌイトのTEKとは、イヌイトが過去数百年にわたって極北の環境に適応しながら蓄積してきた知識と信念と実践の統合的体系のことである。このイヌイトのTEKは、かつては近代科学より劣った「未開の科学」とみなされてきたが、今日では、SEKと対等な世界理解のパラダイムとして認められるようになってきた。そして、共同管理が十全に機能するためには、意志決定の過程にイヌイトが参加することはもちろんのこと、意志決定の根拠として近代科学のSEKだけでなく、イヌイトのTEKを考慮する必要が認識されるようになってきたのである。

しかし、イヌイトのTEKを野生生物資源の管理に活かす共同管理の試みは困難と直面してきた。近代科学のSEKとイヌイトのTEKは、その特性が異なっているためにうまく両立せず、共同管理の現場で両者の見解が対立してしまう場合すらあったからである。今日では、こうした背景をうけて、イヌイトのTEKを近代科学のSEKと両立させるための有効な方策を探ることが求められている。

（　中　略　）

最近20年ほどの間に、極北人類学に限らず、人類学一般において、「伝統的な生態学的知識」(TEK) という術語が頻繁に使われるようになってきた。このTEKは単なる知識体系としてではなく、民俗分類体系、生態系の動態的なプロセスに関する知識、世界観、呪術、芸術、生業技術、禁忌などを含む、先住民の知識と信念と実践の統合的体系として定義され、近代科学と肩を並べるもう一つのパラダイム、あるいはレヴィ＝ストロースの「具体の科学」(1976) に類するものとして語られてきた。つまり、TEKとは、欧米の近代科学の基準における「自然」環境についてだけでなく、「社会」や「超自然」をも含むかたちで先住民に把握されている環境全体について、過去何世紀にもわたるその環境との相互作用を通して先住民がそれぞれに鍛え上げてきた知識と信念と実践の統合的体系の総称であり、欧米の近代科学とは異なってはいるが、知的所産としては近代科学と対等な世界理解のパラダイムのことを意味しているのである。

極北人類学においても、この20年ほどの間に、イヌイトのTEKは盛んに研究されてきた。そして、極北の環境に関するイヌイトのTEKが、イヌイトに固有な世界観に基礎づけられていることが明らかにされてきた。ユダヤ＝キリスト教思想とデカルト思想の流れを汲む欧米近代の自然観が、「自然対人間」という二元論に基づいているのに対し、イヌイトは自然と人間を切り離さずに一体的な全体として捉える一元的な世界観をもっており、イヌイトのTEKが、そうした一元的な世界観に基礎づけられていることが明らかにされたのである。そして、こうしたイヌイトの世界観に従って解読すれば、かつては荒唐無稽な迷信とみなされてきたTEKも、その精確さや説明力の点で、

近代科学のSEKに勝るとも劣らないことが明らかとなった。

特に、TEKの諸研究では、従来は「精霊」と解釈され、非合理的な宗教的概念とされてきた「イヌア」(inua)というイヌイトの概念が、「客人としての動物(animal as guest)」や「人間ではない人物(non-human person)としての動物」という世界理解のためのルート・メタファーなのであって、荒唐無稽な迷信ではないことが示された。この「イヌア」は、「カリブーのイヌア」(tuktup inua)などのかたちで、犬を除いた万物に適用される概念であり、かつては万物に宿っている「精霊」と解釈され、「イヌア」を軸に展開される物語や動物に対するタブーなどは、神話や迷信として理解されてきた。こうした解釈は、「イヌア」を軸に展開される知識が、非合理で主観的な虚構であることを暗黙の前提としており、合理性や経験実証性を基準に、そうした知識を宗教現象として、合理的で客観的な科学的知識から区別する欧米近代の「科学対非科学(宗教、神話、迷信)」という民俗分類に基づくものであった。一方、TEKの諸研究では、この「イヌア」という概念が、イヌイトの視点に立てば、非合理な迷信であるわけでも虚構であるわけでもなく、自己の周囲に観察される様々な現象を精確に把握するためのルート・メタファーであることが明らかにされた。

この「イヌア」を基軸に展開されるイヌイトのTEKでは、動物などの生命体、山河や特定の地理的場所などの非生命体を含め、世界の中の存在が、「イヌア」すなわち「人間ではない人物」として擬人化され、様々な動物種はそれぞれ同種ごとに種社会を形成して人間と同じような社会生活を営んでいるとされている。そして、世界は、様々な種類の「イヌア」たちが、同種ごとに形成する様々な種社会を基礎的な社会的単位に、様々な種社会内関係や種社会間関係を結んでいる巨大な社会空間とみなされ、世界で生じる様々な現象は、その社会空間で展開される様々な社会関係として理解されているのである。

例えば、ジャコウウシの「イヌア」種社会には、人間の社会と同様に経験を積んだ古老がおり、その種社会はその古老の知恵に従って冬季の厳しい環境を生き抜いていると説明される。そして、年老いたジャコウウシを狩りすぎると、繁殖適齢期の若いジャコウウシを乱獲するのと同様に、それぞれの種の個体数を減らしてしまうと認識されている。そのため、運動能力が下がっているために容易に狩ることができるにもかかわらず、年老いたジャコウウシを狩ることは慎まれる。また、ジャコウウシの「イヌア」種社会は、カリブーの「イヌア」種社会を好ましく思っておらず、一方の種社会が進出した地域からもう一方の種社会は撤退すると考えられている。逆に、人間の「イヌア」種社会とアザラシの「イヌア」種社会の場合には、両種社会の間に互酬的な関係が結ばれているとされる。そして、アザラシの「イヌア」種社会が人間の「イヌア」種社会に肉や毛皮を提供して人間社会の繁栄を助ける一方で、人間はそのアザラシに対して、様々なタブーを守ることによって深い敬意を払い、客人としてもてなして海に送ることによって、アザラシの「イヌア」種社会の再生産に助力を与えていると説明される。

こうした「イヌア」のルート・メタファーを軸に展開されるイヌイトの世界理解は、「自然対人間」という二元論を基軸に展開される近代科学の視点からみれば、確かに人間と動物の間の根元的差異を混同している荒唐無稽な「神話」にしかみえない。しかし、実際に観察される様々な現象について、こうしたイヌイトの説明と近代科学の説明を対照的に比較する研究が進展するにつれ、イヌイトのTEKが、多くの場合、精確さや説明力、現象を再現する際の妥当性などの点で、近代科学に勝るとも劣らないことが明らかとなってきた。

例えば、カリブーやジャコウウシなど、様々な動物種の群れにおいては、実際に年老いた個体が、冬季に生き延びるために氷雪の下から食物の植物を掘り出す技術を幼少の個体に教えていることが知られるようになり、イヌイトの説明にある通り、年老いた個体はそれぞれの種で重要な役割を担っていることが明らかになった。また、カリブーの群れの大きさが約70～100年周期で増減を繰り返している可能性をはじめ、様々な動物種が、敵対関係や互酬的関係などのかたちで相互に密接に関連しながら、分布地域や移動ルート、群れの規模を周期的に変えていることなど、イヌイトが諸「イヌア」種社会間関係のメタファーで説明している現象が実際にその通りである可能性が指摘されるようになってきた。一見すると荒唐無稽に見える「イヌア」種社会のルート・メタファーは、決して非現実的で非合理な「神話」であるわけではなく、むしろ、様々な動物種間の複雑で微妙な共生的相互関係を説明するに際しては、近代科学よりも適したパラダイムである可能性が指摘されるようになってきたのである。

以上のように、TEKの諸研究によって、イヌイトのTEKは、イヌイトが環境との間に交わす観念的、社会的、物質的な相互作用を秩序付けている世界理解のパラダイムとしてとらえなおされ、近代科学とは異質ではあるが、対等な知的所産であることが明らかにされてきた。そして、そうした諸研究の成果を背景に、イヌイトのTEKを近代科学のSEKと対等な資格で野生生物の共同管理に活用しようとする機運が生じるようになってきた。

イヌイトの先住民運動が活発化するようになる1970年代以来、今日にいたるまで、イヌイトは先住民運動の一

環として、従来、欧米のドミナント社会が近代科学のパラダイムに従ってイヌイトの意向とは関係なく展開してきた環境管理や環境開発に対して異議を申し立て続けてきた。イヌイトが自身のテリトリー（生活領域）で行われる環境管理や環境開発の過程に主体的に参加する権利を主張するようになり、欧米のドミナント社会の利害に基づいて行われてきた従来の政策決定のあり方と、その基礎となってきた近代科学の一極支配に対して修正を求めてきたのである。当初、この異議の申し立ては、カリブーやクジラ、様々な渡り鳥など、絶滅が危惧された野生生物種を保護するために、イヌイトのあずかり知らぬ国際協定や国内法によって決定された禁猟や禁猟期に対する反対や、マッケンジー川流域などで発見された埋蔵資源の開発、北極海におけるタンカーの定期航路や内陸部におけるパイプ・ラインの建設などへの反対運動として始まった。

こうしたドミナント社会の環境管理計画や大規模環境開発の推進者たちは、その環境に暮らしているイヌイトへの配慮に欠け、イヌイトの意見を聞くことすらなかっただけでなく、カリブーなどの絶滅が危惧されていた野生生物の減少は、高性能ライフルやスノーモービルを手に入れたイヌイトが無節操な乱獲をするようになった結果であるとみなし、イヌイトを管理能力に欠けた無謀な乱獲者として非難することすらあった。特に、生物学者の間では、外的規制がない自然状態の人間には自制心がないとするホッブス的思想と、マンモスやサーベル・タイガーなどの生物種の絶滅が、初期人類の乱獲によって引き起こされたという根拠の曖昧な仮説に従って、イヌイトを含めた狩猟・採集民は本質的に無節操な乱獲者であるとみなす傾向が強かった。そして、高性能ライフルやスノーモービルなどの近代的装備を手に入れる以前は、たまたまイヌイトの生業技術が「原始的」であるために、生態系のバランスが維持されていたにすぎないとみなしてきたのである。

前節でみたように、「イヌア」のルート・メタファーに基づくイヌイトの TEK が、実際にみられる現象を的確に説明していることを明らかにしてきた TEK の諸研究は、TEK に従って実践されるイヌイトの生業活動が、環境管理の面でも優れた能力をもっていることを指摘し、イヌイトに対する欧米近代社会の偏見を是正してきた。そして、近代科学に勝るとも劣らないイヌイトの TEK を環境開発や環境管理の現場で活用することの重要性を強調することで、欧米ドミナント社会の勝手な環境開発に異議を申し立てるイヌイトの先住民運動に理論的な基盤を提供することになった。

こうした流れを受けて、1970 年代後半になると、野生生物資源管理や環境開発計画、環境アセスメントのために行われる調査、分析、意志決定の全過程に、イヌイトが国家や地方自治体の行政組織と対等に参加する共同管理の制度が、極北圏で次々と実現されていった。1975 年の「ジェームズ湾および北ケベックにおける狩猟・漁労・罠猟の管理制度」を皮切りに、1981 年には北アラスカでの「アラスカ捕鯨管理制度」、1982 年の「ビヴァーリーおよびカミノゲアク・カリブー管理制度」、1985 年の「イヌヴィアルイト野生生物捕獲および管理制度」、1993 年の「ヌナヴト野生生物管理制度」など、イヌイトが野生生物の管理に参加する共同管理制度が次々に設立されてきた。こうした共同管理制度では、野生生物資源管理のために行われる調査、分析、意志決定の全過程に、イヌイトが国家や地方自治体の行政組織と対等の資格で参加することが保証されるとともに、その調査と分析の過程では、近代科学の SEK とイヌイトの TEK が対等な資格で協力すべきであるとうたわれている。

しかし、このように、イヌイトの TEK が近代科学の SEK と異質ではあるが対等なパラダイムであることが認められるようになり、共同管理の現場で、イヌイトの TEK を活用しようとする動きが生まれたにもかかわらず、実際に共同管理制度が運営されるようになると、いかにイヌイトの TEK を活用するべきなのかをめぐって問題が生じるようになってきた。TEK を熟知しているイヌイトのハンターと科学者が協力する態勢が整備され、一見すると理想的な状態にあるようにみえる共同管理制度でも、その理想的状態はあくまで形式的な外観だけで、実際にはイヌイトのハンターの意見が黙殺され、科学者の独断で環境管理が進められるケースが決して少なくないことが明らかとなってきたからである。

例えば、コリングスによれば、1992 年にカナダのホルマンで発生したカリブーの群の減少をめぐって 1990 年代半ばに展開された共同管理では、調査、分析、意志決定の全過程にイヌイトが参加する理想的な共同管理が実現されているようにみえながらも、TEK に基づくイヌイトの意見は事実上黙殺され、科学者の独断によってカリブーの禁猟が決定された。長年の詳細な観察と「イヌア」のルート・メタファーに基づいて、イヌイトのハンターは、ホルマン近隣の地域でのカリブーの減少を、その地域へのジャコウウシの進出を嫌ったカリブーの群が他地域へ移動したためであると説明した。しかし、共同管理に参加した行政官や生物学者は、イヌイトのハンターに型通りのインタビューを行っただけでその意見を黙殺し、近代科学の基準に基づいて実施した航空機観測や統計調査などに従って、そのカリブーの減少をイヌイトの乱獲によるものと判定したのである。その結果、カリブーの増加が認められるまで、イヌイトのカリブー猟を禁止することが、イヌイト、行政官、科学者が参加する会議で決定された。

言うまでもなく、TEKに精通したイヌイトのハンターはこの決定には不服であり、自身の意見が科学者からまったく相手にされなかったことに抗議する意味でその会議をボイコットした。しかし、そうした反対派のハンター以外のイヌイトが参加することで会議は成立してしまった。つまり、事実上は、その会議での禁猟の決定は、イヌイトのハンターの意見を封じ込めてなされた決定だったのである。この禁猟の決定は、イヌイトと科学者の間に不信の種を植え込み、イヌイトの間では、イヌイトの生業活動離れを促して同化しようとする政府の陰謀ではないかとする噂まで流れたと報告されている。

また、1991 年にアラスカのクスコクウィム川でのサケ漁を禁止するかどうかをめぐって展開されたユッピク（Yup' ik）と政府の交渉について検討し、その会議の記録を会話分析の手法によって分析したモローとヘンセルは、ユッピクの発言が近代科学の基準から逸脱していることを理由にいかに排除されていくのかを検証している。環境管理や環境開発についてユッピクと政府の間で展開される交渉の場では、近代科学の基準に従った術語や話法、論理が尊重され、科学者の報告に信頼性が置かれるのに対して、TEKに従った術語や話法、論理で語るユッピクの古老には、型通りの発言の機会が与えられるだけで、その発言は政策決定にはほとんど何の影響も与えていないことが明らかにされている。例えば、ユッピクの古老は、クスコクウィム川流域の広大な地域からもたらされた詳細な情報と「イヌア」のルート・メタファーに基づいて、サケの分布地域や移動パターンを説明し、当時減少しつつあったサケは、実際に個体数が減っているわけではなく、移動ルートが変わっただけで、また再び戻ってくると主張した。しかし、政府の行政官は、この古老の発言を溜息混じりに聞き流し、数年間の定点観測という限定された地域と時間で実施された科学的調査の定量的な報告には熱心に耳を傾けたという。その結果、ユッピクのサケ漁は一時的に禁止すべきであるという科学者の勧告がそのまま採用されたのである。

こうした事例は、実証性と客観性の基準を盾に、欧米のドミナント社会が依然として環境開発や環境管理の主導権を手放すつもりがないことだけでなく、本来は近代科学とTEKが対等な資格で協力しあう制度として考案された共同管理の場においても、近代科学が主導権を握り続け、イヌイトのTEKが依然として排除されていることを示している。政策決定に影響を及ぼすのはあくまで近代科学の分析結果なのであって、イヌイトのTEKは、よくても、単に近代科学に基礎データを提供するにすぎないのである。

もちろん、TEKの研究が盛んに行われている今日においては、環境管理や環境開発にたずさわる行政官や科学者も、イヌイトが自然環境に関して精確な知識をもっていることを知らないわけではない。また、共同管理制度の整備が端的に物語っているように、TEKの諸研究の努力によって、今日ではイヌイトのTEKを「未開の科学」とみなす偏見は影をひそめ、近代科学と対等なパラダイムとして尊重する姿勢が一般的になりつつある。また、「我々の任務は伝統的な知識と科学を統合することである」というカナダ環境大臣による発言にみられるように、1990年代には、イヌイトのTEKを近代科学に統合することの重要性が認識されるようになり、実際に統合のための具体的な試みが行われるようにもなってきている。しかし、TEKとSEKの統合は遅々として進まず、むしろ挫折しつつあるという認識が広まりつつある。また、極北圏で調査を行っている科学者を対象に1990年から1991年にかけて民族誌学的調査を行ったビエラウスキーによって、生物学者をはじめ様々な種類の自然科学者の大部分は、イヌイトのTEKが自己の研究と関係があり、場合によっては有用であることを認めているにも関わらず、イヌイトと共同研究を行うどころか、接触したことすらないと報告されている。

〔大村敬一「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争」（秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』（人文書院）所収）による。文献注記などを一部省略した。〕